

〔佳作〕

大人撃退レンジャー

結城 寧々（群馬県 玉村町立南中学校 3年生）

「こちらF、ターゲット確認。西山公園の池近く、遊歩道を北へ移動中。I、応答願う」

時刻は午前一時を過ぎて、夏のぬるい風に夜の湿った臭いが混じっている。手元のトランシーバから、ノイズと共に流れる仲間の声が、俺の身体を興奮にふるわせた。

「こちらI、了解。行動を開始する」

その声に、俺は座りこんでいた茂みからそっと腰を上げ、所定の位置まで移動した。

「……、……、こちらA、実行中にごめん。最近、警察の動きが怪しい。ぬかるなよ」

最年長者の声に、身がぐっと引き締まった。トランシーバを口元に当て「了解」と応じる。

俺はゆっくりと木の陰から顔を出し、周りを見回した。自分の持ち場は池のギリギリに生える木の後ろ。気を抜けば、湿った根元に足が滑って、池に落ちてしまいそうだ。

見つけた。遊歩道に、高そうなスーツを着込んだ初老の男がふらふらと歩いていた。ネクタイなし、襟元にルージューのキスマーク。

ふらりと、男の正面に少年が現れた。作戦開始。ぞくぞくしてきた。

「お父さん」

Iが笑顔で、男に呼びかけた。Iは小五でもう十一になるが、笑顔は幼児みたいに愛らしい。男が驚いた声を上げた。

「おお、ヒカル、どうした、こんな時間に」

「お父さん、あのねえ」

駒井光一Iがきゅつと目を細めた。

「今日、僕の誕生日なんだ。」

相図だ。俺は音もなく木陰から出た。右手には、小型のナイフ。そのまま、Iの父親に近づいていく。他の茂みや木陰からも仲間が動き出していて、俺達はIの父親を取り囲むように立った。

Iも入れて、総勢九人の少年達。俺の仲間。

「なっなんだ君たちは!？」

俺達の持った武器を見て、父親が上ずった声を上げた。Iが張りつめた笑顔のまま、口を動かした。

「でもね、僕」

ゆっくりと実の父親に近づいて、その腹に抱きつく。

「息子の誕生日に、他の女と浮気してるような父親、いらねえな」

ぞつとするような無表情で言い放ち、Iが後ろにさがった。

父親は口をばくばくと動かしている。腹からつき出した包丁。

零れるのは赤より紅い血。

それを皮切りに、俺達が一気に駆けだした。

男の身体に次々と刃物がつき刺さり、四方に鮮血が飛び散る。

鉄臭い血は、やっぱり好きじゃない。だが、仲間とやり遂げた充実感に、自然と口角が上がった。

「バイバイ、お父さん」

息子は無表情のまま、仰向けに転がる父親の腹から包丁を引き抜いた。

「こりゃ、ひどいっすねー」

新人が遺体の前で手を合わせた。

被害者は新井正輝五十七歳。IT企業「コロンブス」社長。遺体には計九箇所の刺し傷。凶器はアイスピック、果物ナイフ等、多数。第一発見者はランニング中の女性で、被害者との面識はなし。妻と、三人の息子がいる。

「単独犯じゃないっすね」

新人が資料を読んでから言うのと、

「んなもん、言われなくてもわかる」と先輩の刑事がうなった。

「おい、新人。これ見て何か気付くか？」

先輩が遺体の前で新人を呼んだ。新人は遺体を見てしばらく首をひねった後、首を横に振った。先輩は「あ、と溜息をつく。

「傷口の位置が低い。大人が刺せばこのあたりだが、この場合、ここだ」

先輩は遺体のみぞおちから下腹部を指差した。新人が「えっじゃあ」と眉を跳ね上げる。

「犯人は、複数のことも？」

「ああ。小学生程の子供の可能性が高い」

先輩が腰を上げ、手で新人に相図した。新人は黙って先輩に続いた。

公園から出て歩きながら、先輩が言った。

「最近、こういう事件、多いだろ。一年前から始まって、今回でもう四回目だ」

確かにそうだ。しかし、それにしても犯人についての情報量が少なすぎる。

「被害者は一番目から政治家、外務庁の役人、大物芸能人、今回も、政治絡みの二オイがしますね」

「どうも、政治絡みの二オイがしますね」

「上からちよろつと聞いたんだが、犯人グループの目星はついてるらしい。推測通り子供のグループで『大人撃退レンジャー』と一部で呼ばれてるとか」

聞いて、新人はくすりと笑った。

「安直っすね。で、何で捕まえないんすか」

新人が聞くと、先輩は声をひそめた。

「それが、そのレンジャーの中に、かなりいいところの坊っちゃん複数いるらしい。下手に動けばそいつらの親から圧がかかって、こっちが苦しくなるわけだ」

「だから絶対、現行犯で捕まえてやるんだ」

絶対、と繰り返し先輩の真剣な瞳を見て、新人は大きく頷いたのだ。

* * *

作戦の翌日、携帯に招集の相図がかかった。

俺は算数のドリルを閉じて、一人家を出た。

「ああ、E。遅かったね」

招集で指定された廃工場の一室に顔を出すと、Gが声変わり前の高い声でそう言った。笑って部屋に入り、資料の散らばった机に近づく。他の仲間はまだ到着してはいたようだ。

「E、今日はその資料を持って帰ってもらっただけだよ。わざわざごめんね」

奥から声をかけられて顔を上げると、Aがこちらに背を向ける格好でデスクチェアに座っていた。目の前のデスクにはパソコンが置かれ、一心にキーボードを叩いている。

「A、お疲れ様です」

横まで来て言うのと、Aは手を止めて初めて顔を上げた。

Aはレンジャーの創設者で、全ての作戦を一人で考え出す、天才的参謀だ。Aの完璧な作戦のおかげで、レンジャーは警察に嗅き回られ、ニュースで『子供犯罪グループ』と騒がれているものの、正体まではつきとめられていない。Aは現在、中一の十三歳。自分の一つ上とは思えない程落ちつきがあり大人だ。

「もうすぐ終わるよ。それよりE、大丈夫かい？ 作戦一から四まですぐと参加しているだろう。次は休んだ方がいいんじゃないか」

「いえ、日本を変えるためですから」

気遣わし気なAに、俺は明るく言った。

「昔、Aが言った通り、今の日本の大人は汚れています。俺達が正してやらないと」

それを聞いて、Aはふっと口元を緩めた。

「そうだね。特に、次の作戦は今までで一番重要だ。君がいてくれた方がいい」

誉められた気がして、俺は嬉しくなった。

「次は真堂誠——Aのお父さん、ですか」

真堂誠一は、Aの父親であり衆議院議員を務める、日本で知らぬ人はいない程の大物政治家だ。マスコミを恐れない強気な発言と行動力から、投票率は年々上がるばかりである。

「テレビではあんな聖人君子を演じちゃいるけど、あの男はこの国で一番汚れた大人だよ。絶対に、僕の手で殺してやる」

熱く語るAの瞳の奥に、ぞっとする程冷酷に燃える炎を見たような気がして、俺は背筋を何かが這い上がっていったように感じた。

空中の一点を見つめていたAがふいに視線を外した。もう炎は宿っていないかった。

「ああ、そうだ。次はJも参加させるよ」

「えっ、エータをですか？」

割りふられるあだ名はレンジャーに入った順に決められる。俺は五番目だからE、Aは創設者、一番目なのでAだ。もし誰かの名前がばれても、そこから他の人物が特定できないよう、Aが考えた仕組だった。

「あっJ、来てくれたのか」

Aが俺の背越しに笑顔で言った。振り返れば、表情の無い、見慣れた小さな男の子がぼんと立っていた。

エータ、と呼びかけると、俺に向けて、億劫そうに薄く笑う。

いつも通りだ。

神崎英太——Jは、小学二年生、俺の近所に住む大人しい男の子だ。同級生の中でも体格が悪く、本ばかり読んでいるため、

じめの対象になっていると聞いたことがある。

「エータ、じゃなくて、J。ここまではどうやって来たんだ。遠かっただろ」

エータは俺の弟的存在で、いつも心配になってしまふ。

「B、さんが迎えに来てくれた」

Jは蚊の鳴くような声で言った。

俺がそうか、と小さく言うのと、Jは視線をさまよわせた後、

Aに向かつて言った。

「Aさん、ぼくたち、人を殺すんでしょ？ 警察に捕まったら、どうするの？」

Aは一瞬、不意をつかれた様な顔をしたがすぐにいつもの穏やかな笑みを浮かべた。

「J、この国は汚れた大人が子供に命令して威張り散らしているけどね、この国の法律では、僕らを裁けないんだよ」

小二にこの話は難しいかと思つたが、Jは真剣な瞳で、淀みなく語るAを見つめていた。

「だから、本当は、大人より僕ら子供の方が強いんだ。何をしてもいい。無敵なんだよ」

話の締めくくりに、AはJの肩に手をおいて安心させるように強い口調で言った。

「不安に思うことはない。捕まったら大丈夫だ。僕らは子供だからね」

初めてAからこの話を聞いた時、俺は単純にすごいと思った。子供は、無敵だ。その言葉が俺の頭を支配して、今まで勝手な事をし続けてきた大人達への憎しみが募るようだった。俺はその場で『大人撃退レンジャー』への参加を決意し、翌日、初めて人を殺した。その決意は今でも、俺の心の内に燃えている。

「じゃあ、決行の日に。またね」

AがにっこりとJに笑いかけると、Jはうん、と言つて、振り返りざま、すつと俺を見上げた。自然と目が合う。

Jの目を見た瞬間、身体が固まった。

Jっていい子だね、と微笑むAにあいづちを打つ間も、俺の身体は動かないままだった。

俺は予言なんてできないけど、本当に、嫌な予感がした。

* * *

机の上に広がる白黒の地図に、大きな赤いマルを描く。

マルの中心は『私立城宮学園』。小中高一貫の有名私立学校だ。「ここに、レンジャーの坊っちゃん達が通ってるんすか」

そうだと先輩は新人に言つた。過去四回の事件現場は、全てこの学園から5km圏内で起こつていて。赤マルの範囲内である。

「うーん、やっぱり範囲広いつすねー。もつと絞れないもんなんですか」

「無理だ。これ以上、証拠がない。子供とはいえ、相手は相当な頭脳派だ。次回だつてこの内で起こるとは限らん」

先輩はぐしゃぐしゃと頭をかきながら地図上の赤マルを指先で叩いた。

はあ、と二人の溜息が重なつたその時、部屋のドアがノックされ、巡査の男が顔を出した。

「あのう、交番に刑事さん達と話したいつて奴がいて、追いつてもダメなんです」

相手にすることもないかもしれないけど、一応と彼は言つた。「気になるな。どんな奴だ？」

巡査はためらう素振りを見せた後、ゆつくりと口を開いた。

俺は大きなごみ箱の裏にしゃがみこんで、トランシーバと小型ナイフを握り締めていた。

時刻は午前二時。実行場所は河豆通りに程近い路地裏である。通りから漏れるネオンの光や騒音が人の気配を色濃く感じさせて、俺は何だか落ち着かない気持ちになった。

暗闇に紛れるため選んだ黒いジャージの袖をいじりながら、トランシーバから流れる仲間の声をすませた。

『こちらD、ターゲット確認。通りのキャバクラから出てきた…、女連れだ。河豆通りを南へ移動中。A、至急応答願う』

『こちらA、作戦を開始する。…頼んだよ』

Aの声は心なしか強張っているように思えた。気付けば一人、はいと応えていた。

今回の作戦は、河豆通りの店から出てくる真堂誠一を、息子であるAが呼びとめて路地裏に誘導、後ろから首を絞めて口を封じた後、すぐに俺達が刺し殺すという内容だ。成功するかどうかはほぼ、Aにかかっている。

すると、通りからさしこむ光に影がさし、話し声が聞こえてきた。Aと真堂誠一だった。

「話とは、何だ。時間がない。早くしろ」

せかず誠一にのんびりしたAの声が続く。

「あー、話っているのはね」

不意に、彼らの正面のごみ箱が倒れる。相図だ。Aが誠一の首に縄をかけるのが見えた。俺も立ち上がり、彼らに向かっただけ出す。

——しかし。

俺が立ち上がって一歩踏み出そうとした瞬間に、どこからか大きな手がのびてきて、ナイフを持った右手をひねりあげた。カラシ、と乾いた音をたてて、愛用のナイフがコンクリートの上に落ち、右腕に激痛がはしる。

訳がわからないまま地面にひき倒され、何者かにのしかかられて動きを封じられた俺は、必死に首をひねって、俺に馬乗りになっている人物を見上げる。スーツを着て、鋭い目をした男だった。周囲を見回すと、仲間皆、今の俺の様に動きを封じられていた。中には、キャバ嬢の様な格好の女もいる。

きつと全員、警察だ。グルだったのだ。では一体、どこから情報を仕入れた？ 誰が情報を流した？

そんな中、若い男に付きそわれて、一人の少年が立ち上がった。「ありがとう。君のおかげだ」

男からそう言われても無表情を崩さない少年の顔を、俺は凝視した。Jだった。

Jは俺の横を通り過ぎる時、俺を見下ろして「お兄ちゃん、ごめんね」と言った。

その瞬間、絶望的な気分になった。全て終わってしまった。心の中でこれまで可愛がっていたエータの姿が、さらさらと消えた。

「悠仁。本当に残念だ。お前が、人殺しをする程愚かな人間だったとは」

静かに言い放ったのは真堂誠一だった。冷たく無機質な視線を、抵抗を受けてはじき飛ばされたのか、尻もちをつけて父親を見上げるAに注いでいる。

「ふざけるな！」

Aが叫んで、包丁を手に誠一に突進した。しかし、その刃が父に届く前に、男二人によって地面におさえこまれてしまう。

「人殺し？ よくそんなことが言えたな。三年前の政治家暗殺事件、裏で糸をひいていたのは一体どのどいつだ？ 四年前の一家殺害事件は、誰の企みだ？」

全部、お前だろオ、とAは父を見上げて絶叫する。その瞳にはいつかの炎が宿っていた。

「ふざけているのは、お前の方だ。真堂家の恥さらしめ。今すぐその口を閉じろ」

誠一は低く、凄みのある声で吐き捨てる。と踵を返してAから

遠ざかっていった。

それを見て、Aが上半身を起こそうともがいた。

「どこへ行くつもりだっ、逃げんじゃねえ」

刑事に押さえこまれ、苦し気にAは言った。

Aが戦おうとしている。ここで、何か言わなくては。Aと志を共にした俺が、何か言わなくては。俺は大きく息を吸いこんだ。

「おい、政治家のクソジジイ、生まれってんだよ！」

突然混じった俺の聲に驚いたらしく、真堂誠一が立ち止まり、ゆっくりと振り返った。

ぼかんとした誠一の顔を見て、俺はここぞとばかりに笑う。

「そうだよお前だよ。お前、国会議員なんだろう？ 国の代表として、俺の質問に答えてくれよ」

誠一は表情を引き締め、身体ごとこちらを向いた。俺は唇を漏らした。

ぼくんばくん、心臓の音がうるさい。「E…」とかすれた声にしてそちらを向くと、Aが俺を見つめていた。上から押さえつけられたせいか、あごの下に赤く血がにじんできている。

俺はAの強いまなざしを見つめ返し、うなづいてみせた。

先に声をあげたのは、Aだった。

「父さん、今、そこら中のマスコミが俺達のことを『少年犯罪グループ』とか騒いでるけど、それっておかしいよな」

誠一は予想外に口を開いたAを睨んだが、Aはおかまいなしに続ける。

「だってさ、大人だって人をだましたり殺したりするのに、大人が犯罪を犯すことは普通みたいじゃないか。子供が大人を殺すことは、大人が大人を殺すよりも重い罪だったりするの？ 俺らがあと十年遅くこの計画を始めてりゃ、何かが変わったのか？」

地面に這いつくばって熟弁するAに、俺は同調した。ぐううと熱い塊が腹の底から頭のとっぺんまで昇ってくる感じがした。

「その通りだ！ 大人だからって、全て子供より偉いだなんて、思うなよ！ 大人は、学校で一日中監視されることも、大声で怒鳴られることもなくなつて、自分は成長しきつたと思ひこんでるだけだ。本当は俺ら子供と何も変わらない。不完全な大人に、あ

しろこうしろなんて言われる筋合い、ねえよ!!」

そう叫んでやると、仲間達が一斉に怒鳴り始めた。

「お前ら、Jを味方に引き入れて、汚ねえんだよ！」

「子供だって何も考えてないわけじゃねえ、思いしれ、大人ども！」

口々に叫ばれた罵詈雑言で辺りは満ち溢れ、刑事達があわてたように動くのが見えた。

真堂誠一は、圧倒されたかのように後ずさりし、ついに背中を向けて走り去った。

俺達は彼がいなくなつてもなお、叫び続けていた。警察には捕まってしまったが、俺にとつてはこれで十分だった。これで何か変わると思えない。けれど、俺達は他の子供にはできなかったことをやりとげた、と思うと涙が溢れた。Aの方を向けば、彼も叫びながら涙を流していた。

俺達は、微笑みを交わした。「大人撃退レンジャー」は今夜、終わった。

* * *

中学の騒がしい教室が、一瞬で静まった。

「こんなのもできないのか。ちゃんとした大人になれないぞ。しっかり覚えろ」

チョークを置き、生徒の顔を見回すと、一人の男子生徒が目

留まった。

良い瞳めをしている。大人をどうこらしめようか考えている、猟犬のような瞳だ。

あの日、『大人撃退レンジャー』が解散してから、俺はあの頃の『俺』が最も嫌悪していた、汚れた大人に成り果ててしまった。

問題を解いている彼の机をのぞきこむ。

——だから、次の世代に打ち破ってほしい。

「なんですか」

彼が目を上げる。挑戦的な、鋭い瞳だ。

「……いや。がんばれよ」

——汚れきった、我々大人を。

俯いた彼の横顔があの頃のAに重なって見えて、俺は前を向き、ちよっと笑った。